夕(ゆうべ)から夜へのパヴァーヌ

揺れるピエロのゆらゆらと

白銀(しろがね)の山稜を歩み下り

孤なる魂と共に谷影へ下り

立ち向かえるは道化のあがきか

慰めは静寂の中に不在(あらず)か

ただ、情緒の迫り来るに怯える

（何故に孤独に耐える力の無さか・・・）

東に濃紺、西に青の眠りに就く世界の
寂として問いに答えず
内なる微かな焦燥は身悶える

（ヴァイオリンのスタッカートの濡れた滴）

稜線も見えずなりて
秘やかな灯火の下
静止したピエロの紅い笑いが私を見つめる

(1983.4.3)